

日本占領下北京の俳句雑誌『春聯』について

付・『春聯』目次（一九四二年三月、一九四四年一月―一九四五年二月）

The Haiku Journal "Shunren" in Beijing During the Japanese Occupation

戸塚麻子

Asako TOTSUKA

（平成三十年十一月九日受理）

抄 録

『春聯』は、日本占領下の北京で発行されていた俳誌である。太平洋戦争開戦後およそ三箇月後の一九四二年二月に創刊され、一九四五年二月まで発行が確認できる。『春聯』は、各俳句結社の垣根を越えた綜合俳誌を目指して発行され、華北各地に支社がつくられ拡大されていた。その中心を担ったのは当時北京で唯一の日本語新聞『東亜新報』社長の徳光衣城であった。また、『東亜新報』主筆の高建子（高木健夫）が、ほぼ毎号にエッセイを寄稿しており、『東亜新報』との強い関係性が指摘できる。

本稿では、『春聯』の概要と掲載された俳句について述べてみたい。また、北京に立ち寄り寄稿した著名人、飯田蛇笏、加藤楸邨、久米正雄の句についても紹介したい。

キーワード…北京 俳句 日本語文学 『東亜新報』 徳光衣城

はじめに

『春聯』は、一九四二年二月に北京で創刊された月刊の俳誌である。現段階の調査では、一九四五年二月五日発行（第四卷第二号）まで所蔵を確認している。戦争末期であること、また、同号末尾の社告に『春聯句集』刊行の無限延期が掲載される等、出版が困難になっていたことから、第四卷第二号が事実上の終刊号となった可能性がある¹⁾。

『春聯』について言及した資料は少なく、また、創刊の時期や発行地に間違いが見られることもある。つまり、現物を実際に閲覧した上での言及は、従来されてこなかったといえるだろう²⁾。戦時下の中国で発行されていたことに加え、発行部数が少なく、日本国内での所蔵が確認できないことが、それらの要因となっていると思われる。興亜総本部調査部編『大東亜地域新聞雑誌総攬』（一九四五年）に拠れば、発行部数は五〇〇部と記されている。

『春聯』が日本国内でいかに流通していないかを示すものとして、以下のような例がある。『春聯』のもっとも中心的な人物であり、選者を務め、評論を載せていた徳光衣城（東亜新報社社長）が、日本引揚後の一九五三年に亡くなった。徳光を偲び有志により『新聞人・徳光衣城』³⁾が発行され、『春聯』に発表していた句が再録された。高木健夫の「あとがき」によれば、「故小池先生の書き抜かれた」句を掲載したという⁴⁾。「小池先生」とは『春聯』の編輯兼発行人をしていた「小池良雄」、俳号「不釣」であろう。その彼ですら、『春聯』の現物を所持していなかったことがうかがえる。そ

もそも小池の書き抜きを用いたということは、徳光も現物を残していなかったと考えるのが自然であるし、「あとがき」を書いた高木健夫も同様だったといえる。高木は『東亜新報』主筆、『春聯』に高建子の筆名で毎号エッセイを寄稿していた。このように、『春聯』の中心的メンバー三名が、現物を持っていなかったと思われるのである。もちろん、引揚のなかで持ち帰るのは不可能に近かっただろうが、その後も入手できなかったということになる。特に高木は「書豚」と自認しているくらいで（『春聯』第一卷第二号に「書豚の寝言」掲載）、引揚後も文献収集に努めた。だが、神奈川文学振興会編『県立神奈川近代文学館所蔵文庫目録7 高木健夫文庫目録』⁵⁾にも『春聯』は記されていない。

そして、管見の限りでは、現在日本での所蔵は確認されていない。本稿では、北京国家図書館での調査に基づき、俳誌『春聯』について簡単な紹介を試みたい。なお、参照できた号は、第一卷第二号（一九四二年三月）、及び第三卷第一号（一九四四年一月）から第四卷第二号（一九四五年二月）である。

一 概要

まず、第一卷第二号は総頁数四〇頁である（頁番号が付されていない頁はカウントしていない。以後同。）表紙絵は川端竜子、表紙裏面に目次、その左頁の扉に飯田蛇笏の「世紀の光」と題した文と句が掲載されている。その裏面は白紙である。

次頁より頁番号が付され、六頁まで「作品」が掲載。巻頭は徳光衣城の「聖火燃ゆ」と題された句、「春雪や戦報スコール沛然と」である。日本語新聞『東亜新報』の社長らしいともいえる、威勢のいい句である。この句がいつ詠まれたか定かではないが、一九四二年二月の『東亜新報』の朝夕一面を見ると、連日シンガポール攻略に関する見出しが躍っている。例えば、二月六日夕刊一面には「シンガポール島攻撃の火蓋切る スコール衝いて我が砲門一斉に咆哮」とある。

話を戻すと、若干の例外を除き、この「作品」欄は巻頭に配置されており、主要同人の句が並んでいる。それ以降に掲載される俳句欄に比べ、ゆったりとしたスペースを取り、大きな活字が使われている。第一巻第二号では、徳光に続いて江川三昧、石原沙人と続く。この三名は第三巻第四号の「春聯同人名簿」北京の項に「理事」として記載されている。「作品」欄の掲載順を見ると、徳光は必ず巻頭か、あるいは最後にたっており、他の同人や理事とは扱いが異なることがわかる。

江川はホトトギス系俳人で、『春聯』では何度も選者を務めている。石原は本名石原秋朗、満鉄から華北交通に移り、北京入りした人物である。『東亜新報』には主に「石原巖徹」の名で、北京の芝居や東洋文化に関する評論等を執筆している。『現代俳句大事典』¹¹⁾では「石原沙人」、『俳文学大事典普及版』¹²⁾では川柳で用いていた「石原青龍刀」で立項されている。ちなみに両事典ともに、石原が『春聯』を一九三七年に創刊したと誤って記されている。さらに後者では、石原が

「満洲」で『山査子』^{さんざし}を創刊し、同年『春聯』も創刊、その二年後に北京に移動したとあり、『春聯』が「満洲」で創刊されたと受け取られかねない記述となっている。なお、石原については中村義『川柳の中の中国』¹³⁾が詳しい。

ここで石川沙人の句を紹介しておきたい。第一巻第二号「作品」欄、「塵霽不分」と題したものである。

三寒四温捷報に慣れしをおそる

先に出げた同号所載の徳光衣城の句と対照的である。なお、石原は青龍刀名義で以下のような川柳も詠んでいる。「東洋の盟主ださうな千鳥足」(『興亜』一九四一年六月)。

『春聯』にはその他、エッセイや評論が掲載されている。いずれも一頁か二頁程の短いものが中心である。長期連載を持っていたのは、徳光衣城、高木健夫、石原沙人である。先にも述べたが、徳光は東亜新報社社長、高木はその主筆である。高木は俳句を詠まないため『春聯』ではもっぱらエッセイを掲載していたが、『春聯』と『東亜新報』との強い関係が指摘できる。『春聯』関連のイベント等もしばしば『東亜新報』紙上に掲載された。

その他、投稿の課題句と選評は毎号必ず掲載されている。また、二巻の途中から、「北支名勝古跡諷詠」と題し、北京、天津、濟南の三つの都市の名勝を詠んだ句が掲載されていたらしい。二巻は未見であるが、第三巻第一号に「前門(北京第十二回)」「国際倶楽部(天津第四回)」「黄河鉄橋(濟南第

七回」とあることから、二巻の第一号か第二号あたりから「北京」の企画が始まったと推定できる。また、三巻と四巻には北野里波亭による「入門俳句」欄がある。初心者投稿句を添削・解説するコーナーである。なお、北野里波亭は青島在住である。前掲の「春聯同人名簿」によれば、青島で唯一の理事となっている。

この雑誌のみどころとして、「句会報」がある。各地に設立されていた春聯支社の状況をよく知ることができる。北京、天津、濟南以外に、青島、開封、石門、新郷、大同等で開かれた句会の年月日や場所等が、俳句・作者とともに記されており、また歓迎句会、送別句会、追悼句会等の記述から、人々の移動やネットワークを知ることができる好個の資料といえるだろう。

三巻では次第に頁数が減少していく。第一号では三二頁、第二号からは二〇頁、第八号からは一二頁となり、表紙裏面から「作品」を掲載するという工夫をみることができ。第一号からは表紙絵までが削除されて白黒印刷になり、代わって目次が掲載されている。頁数は一〇頁となり、第四巻第二号まで踏襲された。

ちなみに、改造社の『俳句研究』に「大東亜俳句圏」という欄があり、第一〇巻第五号（一九四三年五月）では「北京」が取り上げられている。

〔前略〕昨春二月には現地俳誌として「春聯」が北京に於て創刊さるゝに至り、〔中略〕

現在同人、誌友を合せて二百四十名を擁してゐる。〔中略〕

北支の新赛季——と言はむよりは、内地へも与へんとする北支独自の季題については、春聯誌上逐号解説と例句とを挙げて来てゐるが、虚子氏編するところの季寄せが、虚子氏足跡の關係から南方に偏してゐるかの如き觀を呈してゐる現状に照らし、これら大陸季題が今尚埠外におかれてゐるのを甚しき遺憾とせざるを得ないのは果してわれら現地人ばかりであらうか。

署名はないが、内容からして同人の誰かが書いたことは間違いないであろう。「北支の新赛季——と言はむよりは、内地へも与へんとする北支独自の季題」とあるところから、北の季題は内地に広めるに足るものだという自負が見て取れる。そして、虚子が南方ばかりに関心を寄せ、華北の季題に注目しないことを「甚しき遺憾」であると述べている。この後、『春聯』に掲載されたものから一二の句を選び紹介している。以下に挙げるのは、その最初と最後の句である。

纏足の聖女が唄ふクリスマス 深沢素哲

散りそめていよいよ濃ゆし迎春花 中島南北

二、関連する著名人

『春聯』の中心となった俳人には、北京の徳光衣城、江川

三味、石川沙人、小池不釣、青島の北野里波亭、天津の久保松華、他地域では、中島南北等がいた。

ここでは、『春聯』に関係した著名人とその句について紹介したい。まず、先に触れたように、第一巻第二号の巻頭に飯田蛇笏が「世紀の光」という題で文と句を寄稿している。蛇笏の句は「捷報のラヂオに春の雪新た」「国捷ちて世紀の光り梅ひらく」、他三句である。

続いて、同号には銭稻村が「俳句華訳」を掲載。「二」とあることから、また編輯後記の記述から、創刊号にも掲載されていたことがわかる。

雀の子そのけそのけお馬が通る

麻雀躲開 馬來馬來

瘦蛙敗けるな一茶ここにあり

瘦蝦蟇 莫気飯 有我一茶在

その他二句を訳出、掲載している。

次に、第三巻第一号には久米正雄（俳号、三汀）がいる。掲載欄は巻頭の「作品」欄である。「燕京雜詠」と題した「アカシヤの葉振り牌楼透けて見ゆ」、他七句。「牌楼」は中国の門型建築で、当時の北京でよく見られ、また「東単牌楼」等のように地名になっているものもある。さらに、「たま〜芭蕉忌に会ふ」と題し、「北京居留民団のここに芭蕉忌ぞ」が掲載されている。

最後に、加藤楸邨である。第三巻第一〇号、第一一号と二

号にわたり句を寄せている。第一〇号では、巻頭の「作品」欄の冒頭に「大同華嚴寺」のタイトルで掲載されている。

「つかれ来てすがる挽歌の仏かな」「華嚴寺を出て燕の山河かな」、他三句。第一一号では「長城抄」と題し「桔梗や長城に音なかりけり」「夏雪や長城を負ふ忠霊塔」、他六句。異国である中国の仏や寺、風景に素直に心を惹かれる様子が見て取れる。そして「忠霊塔」の句では、果てしなく続く雄大な万里の長城を背景に、小さくたたずむものとして忠霊塔を詠んでいるといえるだろう。

三、創刊期

最後に、創刊期について紹介して終わりとしたい。創刊号は未見のため、『東亜新報』掲載記事を参照する。『東亜新報』第九一九号、一九四二年一月一日（水曜日）朝刊四面に以下の記事が掲載された。「現地俳誌春聯の投句 創刊号は一月七日締切」である。

「春聯」——現地俳誌は愈よ来る二月五日創刊号を發行することとなつたので左の如く汎く一般の投句を希望してゐる

一、雜詠（十句） 徳光衣城選

一、課題句（五句）

創刊号「春聯」江川三味選

第二号「春雪」中島南北選

第三号「若草」中島南北選

一、自選句（五句） 同人のみ

（創刊号には特に大東亜戦争を詠じたものを含み）

一、初学雑詠（五句） 中島南北選（特に句作に初学な人々の為に）

一、締切……以上を通じて

△創刊号 一月七日

△第二号 一月末日

△第三号 二月末日

句稿その他一切の寄稿は北京東単北極閣、小池不釣方「春聯発行所」宛のこと

〔後略〕

以上の記事から、まず、創刊号が二月五日を目指して準備されていたことが分かる。実際の発行日は不明であるが、次に引用する「新刊紹介」が二月一日に出ていることから、その前であったといえるだろう。次に、選者として徳光衣城、江川三昧、中島南北がおり、特に中島は二つの課題句と初心者の選者を務めていることが分かる。江川三昧、中島南北については調査中であるが、第二号に掲載された同人名簿によれば、江川は北京在住、中島は雲母北京支社で選者をしてきたが、先に触れたが、中島は維県とある。江川についてはある時期に北京から維県に移動したようである。両者とも『春聯』では何度も選者を務めている。小池不釣は俳号で、本名は小池良雄か。さきにも触れたが、『春聯』の発行人兼編輯人として奥付に名が記されている。不釣と良雄を同一人物と

する根拠は「真理」（一九六二年四月、特集「同信 小池良雄を偲ぶ」）に拠る。なお、徳光衣城、中島南北、江川三昧、小池不釣は、内地の俳句雑誌である改造社の『俳句研究』にも句が掲載されている。

また、「自選句（五句）」は「創刊号には特に大東亜戦争を詠じたものを含み」という注意書きがあり、時局を感じさせる。『春聯』創刊は、太平洋戦争開戦のわずか三箇月後であり、『東亜新報』には連日緊迫した戦況が報道されていた。そうしたなかで『春聯』は準備されたのである。

次に、同紙に載った新刊紹介、「俳誌『春聯』誕生す」を挙げる。『東亜新報』第九六〇号、一九四二年二月一日（水曜日）夕刊三面に掲載された。

〔前略〕 中身は……批評する資格がないが、どうか内地のタミと障子の環境でなんとかや式でつくられたものでなく、この創刊号に盛られたような逞しい現地的な建設的句作に精進をつづけられたいと冀ふ、イミのない内地の宗匠的な季題などはバリバリと爆砕してこの現地句道緒戦の戦果を拡大して貰ひたい（高建子）
（発行所北京内一区怡王府北極閣「春聯」発行所、定価六十銭）

「川端童子の表紙」を評価したあとに続く文章である。「批評する資格がない」とは、高建子（高木）が俳句を詠まないでこのように書いたのであろう。ただし、先にも述べ

たように高木自身『春聯』に毎号エッセイを寄稿している。右の文で高木が強調しているのは、内地式ではなく、「現地的な建設的句作」「現地句道」ということである。こうした意識は、当時北京で発行されていた文芸同人誌『燕京文学』やその他の詩誌、短歌雑誌等にも共通してみられる。『春聯』は、現地独特の季題を創出し、それをいかに援用して句を作るかということに注力しており、それは各号の誌面から見て取ることができる。

その一つの表れとして、例えば高木は第三巻第一号から第一二号まで、エッセイ「季節雑俎」を連載している。北京の季節それぞれの風俗について論じているという点では、高木が『東亜新報』に連載していた『北京百景』『新版北京横丁』に通じるものではあるが、ここでは俳誌らしく季題を取り上げて述べている。タイトルを順に挙げると、「三寒四温」「春立つ」「つちふり」「清明の頃」「立夏」「新雨」「雨季到る」「熱風」「秋分」「落花生掘る」「駱駝来る」「水」である。内地と共通の季題もあるが、中国や北京独自のものもある。特に「つちふり」は黄砂のことで、北京らしい季題である。高木のエッセイは、必ずしも俳句と関連づけて書いてはいないが、これらは江川三昧が選者を務める毎号の季題と連動している。

次に第一巻第二号の「編輯後記」を挙げる。

「春聯」創刊号は勿々の間に編輯印刷されて色々の手落ちがあつたにも拘らず全く物凄い好評を博し北京等は僅か

三日間にして売切れの盛況を示しましたので自然多数の同好者に行き渡らなかつた事と存じます。殊に北京、天津以外は書店の発売を致しませんでしたし、又当分部数の都合がつき兼ねるものと思ひますから希望の向きは直接購入の程御願申上げます。(中略)

大好評の随筆は創刊号より連載のものゝ外に、素哲、宵水^{ハル}両氏の玉稿を加えました。沙人・高建子・春香諸氏の労作と併せて御愛読に値するものとして推薦して憚りません。(傍線戸塚)

こうした記述から、北京・天津でのみ販売していたこと、三日間で完売したことが分かる。また、「沙人・高建子・春香諸氏」が創刊号から随筆を掲載していたこともうかがえる。高建子(高木健夫)は、第一巻第二号に「書豚の寝言」を掲載しているが、末尾に「つゞく」とあることから、同じタイトルで数号連載されていた可能性がある。「春香」は画家の「上野春香」であり、『東亜新報』に挿絵を掲載している。

以上、俳誌『春聯』について、簡単ではあるが紹介を行った。第一巻第三号から二巻のすべては未見であるが、今後の調査で明らかにできればと考えている。

本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「日本占領下華北における日本語文学の様相に関する基礎的・発展的研究」(研究課題番号18K00335)の成果の一部である。

ⁱ 「春聯句集刊行無期限延期」と題した社告に以下のよう
に記されている。「春聯句集は予告の通り整理編輯を完了し
原稿は既に印刷所を廻附済であったが、資材と印刷諸費に關
しての予想外の困難に横着し〔以下略〕」。

ⁱⁱ 改造社『俳句研究』には『春聯』に關する記述があるが、
「春聯」同人が執筆して投稿したものである。また、高崎隆
治『川柳にみる戦時下の世相』（梨の木社、一九九一年七月）
では『春聯』の発行地を大連と記している（二三七頁）。他
の文献からの引用か、スクラップブック等を参照したものと思
われる。

ⁱⁱⁱ 東亜会有志、一九六九年六月、非売品。

^{iv} 正確に述べれば、『春聯』からの書き抜きと、「北京横丁」
の「切り抜き」を「主として集めた」とある。「北京横丁」
とは、『東亜新報』夕刊の絵入りコラム「新版北京横丁」を
指す。文・高木健夫、挿絵・千地琇弘（琇也）に、徳光衣城
が衣如子の俳号で俳句をつけていた。高木健夫、及び「新版
北京横丁」については、戸塚麻子・神谷昌史「高木健夫『北
京百景』―『東亜新報』掲載時における題目一覧」（『滋賀
文教短期大学紀要』第一九号、二〇一七年三月）参照。

^v 神奈川文学振興会、一九九二年三月。

^{vi} 名簿の記載順も徳光、江川、石川の順である。その他北
京在住理事は四名、小池不釣、渡辺音二、石丸水子、富田秋
良である。

^{vii} 三省堂、二〇〇五年一月。

^{viii} 角川学芸出版、二〇〇八年一月。

^{ix} 『川柳の中の中国―日露戦争からアジア・太平洋戦争ま
で』岩波書店、二〇〇七年八月。

^x 中村前掲書、一頁より再引。

^{xi} 久保松華については、本稿では触れられなかったが、天
津で活躍していた俳人である。天津で発行されていた綜合雜
誌『北支那』にも多くの句を寄せている。竹松良明・秦剛・
戸塚作成の『『北支那』細目』（『戦前期中国関係雑誌細目集
覧』三人社、二〇一八年十二月）参照。

^{xii} 本文、同人名簿では「加藤膏水」とある。

『春聯』細目

凡例

- 一、以下は『春聯』第一卷第二号、及び第三卷第一号から第四卷第二号の細目である。
中国国家図書館蔵のものを参照した。
- 一、書誌は各号の始めに刊行年月日、号数の順に記した。また、通号が記されているものは併記した。
- 一、細目は本文に即して採り、目次表題と異同の著しいものに限り*を付し、各号末に注記した。中段が著者名、下段に掲載頁を記した。
- 一、仮名遣いは原文のままとし、漢字は原則的に新字に改めた。また、数字や記号などは原文のままとし、あえて統一はしなかった。
- 一、本文の表記のほか、各号の巻頭目次及び本文内容を参照して補訂した。
- 一、ルビがある場合は（ ）の内に記した。
- 一、[]内は補校訂・注記であり、本文には表記されていないものである。
- 一、〈 〉は誌上に設けられた各欄の名称である。
- 一、[エッセイ][詩]等、分類内容を記す注記は、内容から判断して補った。
- 一、その他、留意すべき項目には*を付し、各号末に注記した。

昭和一七年三月五日発行（第一卷第二号）

〈表紙〉	川端竜子・画	
世紀の光 [文と俳句]	飯田蛇笏	前付 1
〈作品〉		
聖歌燃ゆ	徳光衣城	1
壁報	江川三昧	1 - 2
塵靄不分	石原沙人	2
鉄鋼の町	深沢素哲	2 - 3
富岳	渡辺音二	3
寒月	久保松華	3
大東亜戦争	小倉緑村	4
近詠	大前恵兵	4
寒紅	山内芳子	5
宣戦後	加藤霄水	5
日々感激	野村務	5 - 6
寒灯	板垣吐史	6

冬草	久保松雪	6
寒木瓜	田牧騷人子	6
生きもの [エッセイ]	深沢素哲	7
親方 (ウエキヤ) に出す手紙 [エッセイ]	上野春香	8-10
俳句華訳 (二) * 1	錢稻村	11
書豚の寝言 [エッセイ] * 2	高建子	12-13
春雪 * 3	中島南北・選	14-16
五月号作品募集 [社告]		16
春聯例会通知 [社告]		16
選後に	中島南北	17
華北新季題概説 (二) 春の部 * 4	石原沙人	18-21
大陸俳誌点描 (一)	加藤霄水	22-23
雑詠	徳光衣城・選	24-35
〈句会報〉		
春聯二月例会 (北京) 二月十日於北電グリル		24-26
北京ホトトギス句会 新年句会 (於一月五日北京北電グリル)		26-28
天津雲母支社句会報 (一月十七日)		28-29
春聯創刊記念天津支部俳句大会 一月二十五日夜於日本人倶楽部		29-31
句会報 (青島) 一月二十五日於高田耕助宅		31-33
北野里波亭氏来青歓迎句会報 (青島) 二月一日於三条羽村宅		33-34
北京ホトトギス句会 一月例会 於一月二十日北京電々グリル		34-35
陣中作品		35-37
ハワイ海戦に寄す [詩]	加藤介牟之	35-36
強く生きる道 * 5	富安風生	37
お知らせ! [社告]		37
雑詠選後の独語	衣城	38-39
編輯後記	まさを 鵬生	40
同人一覽		(41)

* 1 一茶の句の中国語訳。

* 2 末尾に「つゞく」とあり。

* 3 目次では「課題句 (春の雪)」。

* 4 末尾に「(未完)」とあり。

* 5 末尾に「富安風生著「草木愛」より」とあり。

昭和一九年一月五日発行（第三卷第一号 二四号）

〈表紙〉	川端竜子・題字 伊藤恵之助・画	
〈大乘寺俳話〉 芭蕉より芭蕉へ [エッセイ] * 1	石原沙人	1
〈作品〉		
枯野	三木朱城	2
冬至	林周平	2
江南四季	堀場定祥	2
学会行	森脇襄治	2
南海抄	山本歩禅	2
故郷清秋	半田畔子	2
渡鳥	八田一郎	3
北海戦信	山上丹五郎	3
枯蓮	高松梅城	3
太根 * 2	和泉充子	3
慰霊祭	北浦菽水	3
寒林	蓑口祈水	3
北京神社	小池不釣	4
蓬萊	久保松華	4
近詠	北野里波亭	4
鬼灯	田中文字子	4
千葉宿	富田秋良	4
残菊	深沢素哲	4
槐の実	石原沙人	5
決戦第三年	江川三昧	5
大き初日	徳光衣城	5
勅題『海上日出』を畏みて	徳光衣城	5
枯葉	周之菝	5
燕京雑詠	久米三汀	5
昔なつかし前門外	久米三汀	5
たまたま芭蕉忌に会ふ * 3	久米三汀	5
大陸俳壇の黎明期（三） 燕塵・長城・雑草から	徳光衣城	6 - 7
季節雑俎① 三寒四温	高建子	8 - 9
〈北支名勝古蹟諷詠〉		
前門（北京第十二回）		10
国際倶楽部（天津第四回）		10-11
黄河鉄橋（済南第七回）		11

〈課題句〉 兎狩	田中丈子・選	12
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	13
信念 [エッセイ]	小池不釣	14
軍用機献納俳句展記 * 4	鵬生	15
春聯社主催 芭蕉翁二百五十年忌俳句大会 雑詠	衣城・選	16-17
〈句会報〉		
北京春聯句会 十二月五日 日本俱樂部		18-20
芭蕉翁二百五十年忌記念俳句会 (天津)		20-22
〇〇部隊慰問句会 開封春聯支社		22-23
天津春聯句会 十月十日 於内山水棹居		23-24
かさゝぎ句会 (青島) 十月十五日 於 正美洋行		23-25
石門ほとゝぎす句会 十月二十日		25
かさゝぎ句会 (青島) 十月二十二日 於正美洋行		25-26
岡本木綿崎氏歓迎句会 十月三十日 石門春聯支社		26
草萌句会 (天津) 十月三十一日 於久保松華居		26-27
草萌句会 (天津) 十一月六日 於久保松華店		27
鵲句会海浜公園吟行 (青島) 十一月七日		27-29
かささぎ句会 (青島) 十一月十二日 於正美洋行		29
草萌句会 (天津) 十一月十三日 於久保松華居		30
草萌句会 (天津) 十一月十四日 於久保松華居		30-31
天津雲母句会 十一月二十日 於内山水棹居		31-32
華北俳壇消息 * 5		32
句会決戦調		32
編輯後記		33

- * 1 目次では「大乘寺俳語」。
- * 2 句中では「大根」。
- * 3 「たまたま」の後の二字は踊り字。
- * 4 久米三汀 [久米正雄] への言及有り。
- * 5 「青島に春聯支社設立さる (一一、一六)」とあり。

昭和一九年二月五日発行 (第三卷第二号 二五号)

〈表紙〉	川端竜子・題字 伊藤恵之助・画	
作品募集 [社告]		前付 1

北京春聯句会〔社告〕		前付 1
北京名勝古蹟諷詠句募集〔社告〕		前付 1
〈作品〉		1
年の夜	皆吉爽雨	1
武昌点景	野村杜季子 * 1	1
近詠	北野里波亭	1
決戦調	中村燕城	1
年賀 楊柳青に年画を訪ねて(五句)	石原沙人	1
越年の旅	徳光衣城	1
大陸俳壇の黎明期(四) 一燕塵・長城・雑草の三誌から一	徳光衣城	2 - 3
季節雑俎② 春立つ	高建子	4 - 5
こんろんまる〔俳文〕	小池不釣	6 - 7
〈大乘寺俳話〉昭和十八年の句	石原沙人	7
〈北支名勝古蹟諷詠〉		
故宮(北京第十三回)		8
五柳閣(済南第八回)		8 - 9
八里台(天津第四回) * 2		9
本誌紙幅の節減断行に就て〔社告〕		9
〈課題句〉寒月	富田秋良・選	10
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	11
〈句会報〉		
北京春聯句会 一月九日 於日本俱樂部		12
大同春聯句会 十一月一日		12
大同春聯句会 十一月九日		12
大同春聯句会 十一月十二日		12
白衣勇士慰問句会(新郷) 十一月二十一日		12
大同春聯句会 十一月二十三日		12
天津春聯句会 十二月五日 塚田畏神居		12-13
白衣勇士慰問句会(新郷) 十二月五日		13
開封春聯句会 十二月八日 増田秋水居		13
衣城先生歓迎句会(徐州) 十二月二十六日 高松梅城居		13
春聯石門支社発会祝賀句会 一月二日 於南大街日本		13
会報欄のこと〔社告〕		13
〈雑詠〉	衣城・選	14-20
編輯後記	鵬生	21
雑詠……衣城選〔社告〕		

* 1 三卷五号、三卷九号に「野村杜季子」がおり、同じ人物か。一卷二号、三卷四

号、三卷一一号の「同人名簿」に記載なし。

* 2 正しくは「第五回」。

昭和一九年三月五日発行（第三卷第三号 二六号）

〈表紙〉	川端竜子・題字 伊藤恵之助・画	
作品募集〔社告〕		前付 1
北京春聯句会〔社告〕		前付 1
北京名勝古蹟諷詠句募集〔社告〕		前付 1
〈作品〉		
立春壮行	徳光衣城	1
大同の旅	徳光衣城	1
大同華嚴寺	田中丈子	1
春節の頃	石原沙人	1
鵲	三条羽村	1
日脚伸ぶ	長谷川巖	1
大陸俳壇の黎明期（五） 燕塵・長城・雑草の三誌から	徳光衣城	2 - 3
季節雑俎③ つちふり	高建子	4 - 5
俳句と私	桐山一笑	6 - 7
〈句会報〉		
長 谷川巖氏歓迎句会 * 1		7
天津春聯句会 一月十五日 於内山水棹居		7
徐州春聯句会 出口両町氏送別 一月二十二日 梅城居 * 2		7
開封春聯支社正月句会 一月二十三日 南山居		7
〈北支名勝古蹟諷詠〉		
瑠璃廠（北京第十四回）		8
三不管（天津第六回）		8 - 9
済南神社（済南第八回） * 3		9
〈課題句〉三寒四温	江川三昧・選	10
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	11
正月〔俳句〕	北野里波亭	11
雑詠	衣城・選	12-20
野村務氏を悼む * 4	鵬生	20
〔同人消息〕		20
雑詠〔社告〕		21
編輯後記	鵬生	21

- * 1 「長谷川巖」。
- * 2 「両町」は「雨町」の誤植か。
- * 3 第九回か。
- * 4 野村務は天津春聯支社幹事とある。

昭和一九年四月五日発行（第三卷第四号 二五号 * 1）

〈表紙〉	川端竜子・題字 伊藤恵之助・画	
作品募集〔社告〕		前付 1
北京春聯句会〔社告〕		前付 1
北京名勝古蹟諷詠句募集〔社告〕		前付 1
〈作品〉		
つちふり	徳光衣城	1
近詠	中島南北	1
木の芽	吉田静子	1
早春の道	滝沢露峽	1
雍和宮打鬼	石原沙人	1
大陸俳壇の黎明期（六） 燕塵・長城・雑草の三誌から	徳光衣城	2 - 3
季節雑俎④ 清明の頃	高建子	4 - 5
〈大乘寺俳話〉 現地俳句と詩性	石原沙人	6
〈課題句〉 立春	江川三昧・選	7
〈北支名勝古蹟諷詠〉		8 - 9
雍和宮（北京第十五回）		
北寧公園（天津第七回）		
大観園（済南第九回）		
〈句会報〉		
北京春聯句会 三月四日 日本倶楽部		10
天津下萌句会 一月廿九日 久保松華居		10
天津下萌句会 二月二日 久保松華居		10
荒木千水氏壮行句会 二月六日 青島春聯支社		10
米川玉兎君送別会 二月六日 門封春聯支社 * 2		10-11
天津下萌句会 二月九日 久保松華居		11
天津下萌句会 二月十七日 久保松華居		11
春聯天津句会 二月十五日 内山水棹居		11
春聯天津句会 二月十九日 滝沢露峽居		11

石門春聯句会 二月十九日 東本願寺		11
新郷春聯句会 (立而山、去山両氏歓迎) 二月二十一日 長谷川巖居		11
開封春聯句会 (去山・巖両氏歓迎) 二月二十三日 藤河立而山居		11
〈雑詠〉	衣城・選	12-18
開封春聯支社主催 軍用機献納俳句展 [社告]		18
哀悼 野村務氏	鵬生	18
春聯同人名簿		19-20
編輯後記	鵬生	21
雑詠 [募集広告]		

* 1 目次の記載による。正しくは「二七号」。

* 2 正しくは「開封」。

昭和一九年五月五日発行 (第三卷第五号 二八号)

〈表紙〉	川端竜子・題字 伊藤恵之助・画	
作品募集 [社告]		前付 1
北京春聯句会 [社告]		前付 1
〈作品〉		
清明	徳光衣城	1
迎春花	北野里波亭	1
水の春	北浦菽水	1
支那に住む	池田豊城	1
さくら鯛	中村燕城	1
近詠	野村杜季子	1
壕を掘る	石原沙人	1
大陸俳壇の黎明期 (七) 燕塵・長城・雑草の三誌から	徳光衣城	2 - 3
季節雑俎 * 1 立夏	高建子	4 - 5
旅行者の作品に顧みる	石原沙人	6 - 7
〈課題句〉 霾	久保松華・選	8
〈北支名勝古蹟諷詠〉		
東嶽廟 (北京第十六回)		9
東浮橋 (天津第八回)		10
忠霊塔 (済南第十回)		10-11
〈入門俳句〉 四月号	北野里波亭・選	11-13
〈入門俳句〉 五月号	北野里波亭・選	13

〈雑詠〉	衣城・選	14-19
〈句会報〉		
北京春聯句会 三月二十五日 日本俱樂部		20
天津春聯句会 三月十日 内山水棹居		20
新郷春聯句会 三月十一日		20
献納機命名式		20
新郷春聯句会 三月十二日		20
太原春聯句会 三月十八日 露峽居		20
雑詠 [募集広告]		21
編輯後記	鵬生	21

* 1 目次には「季節雑俎⑤」とあり。

昭和一九年六月五日発行（第三卷第六号 二九号）

〈表紙〉	川端竜子・題字 伊藤恵之助・画	
作品募集 [社告]		前付 1
北京春聯句会 [社告]		前付 1
〈作品〉		
柳絮	徳光衣城	1
太廟	北野里波亭	1
天長節	小沢隆山	1
柳絮	石原沙人	1
法源寺春寒	田元北史	1
大陸俳壇の黎明期 (八) 燕塵・長城・雑草の三誌から	徳光衣城	2 - 3
季節雑俎⑥ 新雨	高建子	4 - 5
〈大乘寺俳話〉 満華人への俳句伝導	石原沙人	6 - 7
〈課題句〉 清明節	江川三昧・選	7
〈北支名勝古蹟諷詠〉		
法源寺 (北京第十七回)		8
大連碼頭 (天津第九回)		8 - 9
北公園 (濟南第十一回)		9
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	10
〈句会報〉		
北京春聯句会 三木朱城先生歓迎 四月二十九日 日本俱樂部		11
三木朱城先生歓迎 四月三十日 北京文化協会		11

北京春聯句会	一周之萩氏を繞りて一	五月十日	言成子居	11-12
白衣勇士句会	於新郷	三月二十六日	長谷川巖・選	12
天津春聯句会	田元北史歓迎句会	四月二日	吟行	12
天津春聯句会	吉岡青瓦氏送別句会	四月八日	内山水棹居	12
太原春聯句会	四月二十二日	落峽居		12
開封春聯句会	四月三日	北畠泗川居		12
石門春聯句会	四月	東本願寺		12
新郷春聯句会	三月二十一日			12
〈雑詠〉			衣城・選	13-20
編輯後記			鵬生	21
雑詠（五句）[募集広告]				21

昭和一九年七月五日発行（第三卷第七号 三〇号）

〈表紙〉		川端竜子・題字	
		伊藤恵之助・画	
作品募集 [社告]			前付 1
北京春聯句会 [社告]			前付 1
〈作品〉			
一椀の茶		徳光衣城	1
柳絮		富田秋良	1
青島にて		石原沙人	1
近詠		北野里波亭	1
門頭溝採炭見学		佐藤静鳥	1
大陸俳壇の黎明期（九）	燕塵・長城・雑草の三誌から	徳光衣城	2 - 3
季節雑俎⑦	雨季到る	高建子	4 - 5
月謝 [エッセイ]		上野春香	6 - 7
〈作品〉			
春		池田豊城	7
河南作戦		長谷川巖	7
麦と飛機		高松梅城	7
万緑		吉田静子	7
〈北支名勝古蹟諷詠〉			
五塔寺（北京第十八回）			8
天橋（済南第十二回）			8 - 9
第一公園（天津第十回）			9
〈課題句〉 立夏		江川三昧・選	10

〈入門俳句〉	北野里波亭・選	10
柳絮によせて [エッセイ]	平尾苔石	11
〈句会報〉		
北京春聯句会 五月二十七日 日本倶楽部		12
石原沙人歓迎句会 五月二十一日 徐州春聯文社 * 1		12
大同春聯句会 五月六日		12
濟南春聯句会 五月十四日 緒方斗南居		12
濟南春聯句会 五月二十日 山下奴牛居		12-13
濟南春聯句会 五月二十一日 井上洪雨居		13
大同春聯句会 四月二十三日		13
新郷春聯句会 六月四日		13
太原春聯句会 六月十七日		13
濟南春聯句会 六月十七日 山下奴牛居		13
恵女忌		13
〈雑詠〉	衣城・選	14-20
編輯後記	鵬生	21
雑詠 [募集広告]		21

* 1 「文社」は「支社」の誤植か。

昭和一九年八月五日発行（第三卷第八号 三一号） * 1

[〈作品〉]		前付 1
河南の旅より	石原沙人	前付 1
蒙古草原	田中文字子	前付 1
近詠	北浦菽水	前付 1
野薔薇	池田豊城	前付 1
近詠	滝沢露峽	前付 1
燕京初夏	富田秋良	前付 1
みじか夜	徳光衣城	前付 1
作品募集 [社告]		前付 1
北京春聯句会 [社告]		前付 1
大陸俳壇の黎明期 (十) 燕塵・長城・雑草の三誌から	徳光衣城	1 - 2
季節雑俎 (八) 熱風	高建子	3
〈雑詠〉	衣城・選	4 - 10
サイパン黙禱 [俳句]	徳光衣城	10
〈課題句〉 祈雨	小池不釣・選	11

〈入門俳句〉	北野里波亭・選	11-12
[〈句会報〉]		12
北京春聯句会 六月二十四日 日本倶楽部		12
編輯後記		(13)
雑詠(五句)[募集広告]		(13)

* 1 目次がなく、表紙裏面より作品が掲載。表紙の絵と題字は前号までと同一であるが、作者の氏名は記されていない。以上、三巻一〇号まで同様。

昭和一九年九月五日発行(第三卷第九号 三二号)

[〈作品〉]		
槐の花	徳光衣城	前付 1
夏暁の祈	石原沙人	前付 1
近詠	中村燕城	前付 1
献納機命名式	高松梅城	前付 1
雨季将軍	野村杜季子	前付 1
合歡の花	北野里波亭	前付 1
作品募集[社告]		前付 1
北京春聯句会[社告]		前付 1
季節雑俎(九)秋分	高建子	1
〈雑詠〉	衣城・選	2-7
俳誌春聯規約		7
〈課題句〉雨季	江川三昧・選	8
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	8-9
[〈句会報〉]		
高木峡川氏歡迎春聯句会 六月廿八日 日本倶楽部		9
開封春聯句会 七月十六日 秋水居		9
[〈作品〉]		
月下香	久保松華	10
柳絮飛ぶ	北浦菽水	10
晚香玉	谷村京雷	10
熱風	和田塊生	10
花卉残炎	平尾苔石	10
討匪行	小沢隆山	10
しげり	滝沢露峽	10
太廟	石川言成子	10

編輯後記	(11)
雑詠（五句）[募集広告]	(11)

昭和一九年十月五日発行（第三卷第一〇号）

[〈作品〉]		
大同華嚴時	加藤楸邨	前付 1
棗	石原沙人	前付 1
サイパンの勇士の靈に	池田豊城	前付 1
大暑	北浦菽水	前付 1
梧桐	佐藤椎花	前付 1
増産日本	前田圭史	前付 1
長江を渡りて	永井とよき	前付 1
天高し	徳光衣城	前付 1
作品募集 [社告]		前付 1
北京春聯句会 [社告]		前付 1
季節雑俎（10）落花生掘る	高建子	1
〈雑詠〉	衣城・選	2 - 7
俳誌春聯規約		7
〈課題句〉熱風	江川三昧・選	8
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	8 - 9
[〈句会報〉]		
高木峽川氏歓迎春聯句会 六月廿八日 日本倶楽部		9
開封春聯句会 七月十六日 秋水居		9
編輯後記		(10)
雑詠（五句）[募集広告]		(10)

昭和一九年十一月五日発行（第三卷第一一号）* 1

〈作品〉		
長城抄	加藤楸邨	前付 1
秋灯	田中文字	前付 1
箱根行	佐藤静鳥	前付 1
蒙古の秋	前田圭史	前付 1
鷺の杜	岡本木綿崎	前付 1
鳥渡る	滝沢露峽	前付 1

露	久保松華	前付 1
爽やか	吉田静子	前付 1
露の陣	長谷川巖	前付 1
暁霧	石原沙人	前付 1
月の草	徳光衣城	前付 1
季節雑俎 (11) 駱駝来る	高建子	1
〈雑詠〉	衣城・選	2 - 7
〈課題句〉 立秋	江川三昧・選	7
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	8
〈句会報〉		8
北京春聯句会 九月三十日 日本倶楽部		8
春聯天津支社九月例会 観月句会 十月一日 水棹居		8 - 9
新郷春聯句会 八月二十日		9
徐州春聯支社句会報 九月二日 文化道場		9
新郷春聯句会 九月三日		9
鄭州春聯句会 九月十六日 前田南山居		9
曾根岡草児氏歓迎句会 九月二十二日 天津久保松華居		9
春聯同人名簿		10
作品募集 [社告]		(11)
北京春聯句会 [社告]		(11)
編輯後記		(11)

* 1 表紙から伊藤恵之助の絵がなくなり白黒印刷になる。川端竜子の題字はそのまま残り、その下に四角で囲まれた簡略な目次が掲載される。三巻二号まで同様。

昭和一九年一二月五日発行 (第三巻第一二号)

〈作品〉		
近詠	石原沙人	前付 1
濃紅葉	富田秋 * 1	前付 1
菊	陶山貞女	前付 1
草紅葉	北浦菽水	前付 1
戦捷の秋	石原沙人	前付 1
近詠	北野里波亭	前付 1
かちどき	徳光衣城	前付 1
季節雑俎 (12) 氷	高建子	1
〈雑詠〉	衣城・選	2 - 7

軍用飛機献納俳句展		7
〈課題句〉落花生掘る	江川三昧・選	8
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	8
〈句会報〉		
北京春聯句会 十月二十八日 日本俱樂部		9
天津春聯支社 東浮橋菜市吟行久保正弥氏送別句会 十月二十二日 於水棹居		9
新郷春聯句会 九月十七日		9
新郷春聯句会 九月廿四日		9
新郷春聯句会 十月一日		9-10
濟南春聯句会 十月十八日 緒方斗南居		10
白衣後送〔俳句〕	(白衣) 吉川竹水	10
作品募集〔社告〕		(11)
北京春聯句会〔社告〕		(11)
編輯後記		(11)

* 1 「富田秋良」か。

昭和二〇年一月五日発行（第四卷第一号）

〈作品〉		前付 1
駱駝来る	江川三昧	前付 1
近詠	北野里波亭	前付 1
勅題	久保松華	前付 1
駱駝来る	石川言成子	前付 1
旅の林檎	多賀城	前付 1
青島紀行	平尾苔石	前付 1
京漢線打通（於漢口）	長谷川巖	前付 1
神風特別攻撃隊	前田圭史	前付 1
紅葉	藤末硯子	前付 1
万寿山頤和園	徳光衣城	前付 1
北京の景色①西山霽雪	高建子	1
〈雑詠〉	衣城・選	2-7
華北新季題句募集〔社告〕		7
春聯句集予約募集〔社告〕		7
〈課題句〉駱駝来る	江川三昧・選	8
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	9
〈句会報〉		

北京春聯句会 十一月二十五日 日本俱樂部	9
濟南春聯句会 十月三十日 緒方斗南居	9-10
新郷春聯句会 (十月二十二日)	10
新郷春聯句会 (十一月十二日)	10
石丸水子氏送別句会 十二月三日 北京日本俱樂部	10
作品募集 [社告]	(11)
北京春聯句会 [社告]	(11)
編輯後記 * 1 鵬生	(11)

* 1 2巻では、高建子「燕都采風誌」が連載されていたとある。

昭和二〇年二月五日発行 (第四卷第二号)

〈作品〉		
胡沙しまき	徳光衣城	前付 1
近詠	富田秋良	前付 1
絶えゆく命	久保松華	前付 1
神風特攻隊	国安一帆	前付 1
年逝く	池山淵堂	前付 1
末枯	永井とよき	前付 1
かりがね	小沢隆山	前付 1
枯野星	池田豊城	前付 1
初雪	北浦菽水	前付 1
独り旅	滝沢露峽	前付 1
芝罘の冬	石原沙人	前付 1
近詠	江川三昧	前付 1
北京の景色②薊門煙樹	高建子	1
〈雑詠〉	衣城・選	2-8
〈課題句〉 氷	江川三昧・選	8
〈入門俳句〉	北野里波亭・選	9
〈句会報〉		
北京春聯句会 十二月二十三日 春聯発行所		9
濟南春聯句会 十二月二十二日 緒方斗南居		9-10
通夜句会 十二月十五日 故久保松華二女武子の通夜当夜		10
故松華二女武子の追悼句 (芳香院妙深日武信女) 十二月十七日 天津妙法寺		10
長谷川巖氏歓迎句会 十二月十三日於泗川居		10
中村燕城氏歓迎句会 開封春聯支部 十二月十九日於野江居		10

新郷春聯句会（十二月二日）	10
新郷春聯句会（十一月二十六日）	10
作品募集〔社告〕	(11)
北京春聯句会〔社告〕	(11)
春聯句集刊行無期延期 社告	